

古き良き時代の内務官僚の残照
～夢に酔った若き日々の思い出～

大貫啓行

私達（昭和42年警察庁上級職採用）は内務官僚の雰囲気につき得たギリギリ最後の世代だった。内務省採用時代の最後の人々は、それぞれに敗戦の口惜しさを抱いて内務省から分割された警察庁の課長以上の幹部としてそこに存在していた。採用されたての私たちにとってははるかな雲の上の存在。とはいえ、私たちは採用されたばかり、何も怖がるという思惑の射程外の存在だった。雲の上の先輩諸兄もむしろ品定めのご好のターゲットといった存在。諸先輩も物おじしない若手を時に宴席などの機会を設けて可愛がってくれた。そうした場では、内務官僚としての、官僚の心得などが語られた。

例えば後藤田正晴さんもそうした先輩の一人だった。防衛庁や自治省などを含め旧内務省採用の先輩たちの人事配置先は格好の話題だった。そこでの人物評は私たちにとっての官僚たるもののあるべき姿を考える教材だった。出身地から出身高校、たどったポスト・勤務先、果ては配偶者や先輩後輩の絡みまでの人事情報の詳しさには驚かされた。それが内務官僚の基本だと気づかされた。内務省は伝統的に人を大事にした。

印象に残る心得に、「20代は法律家、30代は行政官、40代は政治家を目指せ」がある。若い時は、法律など専門領域の勉強に取り組み、30代ともなれば政策立案や政策実現への駆け引きにも強くなければならない。最後は官僚の域を超えて天下国家の経営者となる気概がなくてはならないなどと、、、。

いきなり天下国家の経営といっても不可能だから、今から、10年後20年後を目指して、その積りになって備えなくてはならない。天下国家の経営者になる20年前に何をしていたかなければならないのか？・・・という志・発想が求められた。

大風呂敷といえばその極みだが、その気概が内務官僚の先輩に感じられた。自然、右も左もわからない大学出た手の私たちもそうした雰囲気に染められたのだった。

内務官僚にとっては、年金も労働政策も守備範囲。防衛や財政も視野に入っていた。日本国の運営をいかにすべきかという意識だった。そこでは、刑事や交通はマイナーな問題という感覚だった。内務省解体した米軍占領を終えての日本の姿の設計。国家復興はいかにあるべきかという視点が原点にあった。

今の警察庁とは異質の空気が支配していた。今日の刑事畑、交通畑、生安畑、警備畑と

いう感覚は当時にすればコマイコマイといった類だろうか。せいぜい20代の感覚という程度か。内務省時代は課長補佐単位の問題といった感覚だったろうか。

ある意味、私は当時の雰囲気酔った。たまたま多分に偶然といった人事のなせる差配も手伝って私の酔いはなかなか醒めなかった。特殊分野とでも言える外事警察分野で大部分を過ごしたのだった。実質的に、刑事も警備も経験しなかった。生安や交通に至っては完全に無縁。結果、30年にも及んだ警察官僚へのくすぐったさ、いまだに警察に関してどうもあまり経験していない者が多く、居心地の悪ささえ覚える時がある。

見果てぬ夢だったが、当時私の温めていたのは、国際情報機関としての知識、技能を理解した上で、外務省、警察庁の情報にも接することのできるプロ情報官僚の育成だった。省庁の縦割り意識の上に来上がっているわが国の官僚組織を前提とすれば、無謀な物、しょせんは夢だった。

現実的な案としては、各省庁採用の官僚から情報センスのいい人を選んで、途中で内閣調査室に転籍、その上で、国際情勢のプロとして仕上げるといったもの。本籍を内閣調査室に置いたまま、幹部外交官や幹部警察官としての肩書も持たせようとしたかった。駐米公使が内調職員でもあるというイメージ。内閣への情報分析の支えとなる官僚を育成するのが目的だった。退官後、国際部は外事情報部へと衣替えし、内閣情報監（内調）、危機管理監（危機管理室）という形で国際情報部門の充実への歩みが始まったことを喜んでいる。

若い時の影響も手伝って、私の発想は得てして、警察庁という枠を外れがちだった。私は警察庁初代国際部長に任命されたが、私の構想とは異質のもので、実は当初から違和感が強かった。主に国際刑事警察機構（ICPO）対応するもので刑事局の範疇であることへの不満を内に秘めていた。

私のイメージは、刑事部門の国際関係も担当するが、理想は情報機関への展望を持ったもの。従って、せめて警備局外事部でなくてはならなかった。

その段階で大学の教壇に転じることを決意したのだった。

国際情報プロの育成は、ますます今日的な重要課題となっている。そうした視点からの省庁機構の改編も引き続き大いに議論してもらいたい。